

保健体育科教職課程を有する大学の コロナ禍における「体づくり運動」の授業に関する事例的研究

鈴木慶子

I. 緒言

平成 29 年に告示された中学校の学習指導要領および高等学校の学習指導要領では、従前の学習指導要領に引き続き「体づくり運動」が示されている(文部科学省、2018; 文部科学省、2018)。しかし鈴木(2018)は、大学での体づくり運動の授業において大学生に事前アンケートを行い、『体づくり運動』という名称を聞いたことがありますか? という質問に対して、「はい」と回答した学生は 22% だったことを報告している。また、「中学校および高等学校の体育で体づくり運動を行いましたか?」との質問に「はい」と答えた学生は 12% と、こちらも低い数値を出した。体づくり運動が学生間に広く浸透するまでは今後も時間を要することが予想される。

以前から体づくり運動については、「どうやれば上手に指導できるかわからない」「1 時間持たない」などの教員の苦悩が指摘されてきた(深谷、2016)。高田(2017)も「体づくり運動の指導については、教員歴に関係なく不安を覚えている教員が多いと考えられる」と指摘している。小学校の教員だけでなく、体育を専門としている中学校や高等学校の教員の中にも、同様の意見を抱いている教員、体づくり運動の経験を持たない教員、体づくり運動に困惑している教員が存在していることが考えられる。そこで保健体育科の教職課程を履修する学生が教育実習に向いたり、教員として採用されたりした際に体づくり運動の授業ができるよう、大学で体づくり運動を充実した授業にする必要がある。

さて、2020 年の新型コロナウイルスの感染拡大によって多くの大学でオンラインでの授業展開を余儀なくされた。高橋(2021)は大学でのコロナ禍におけるオンラインのダンスの授業について報告している。そこで、コロナ禍において大学で行われた

体づくり運動の授業についても書き記しておくべきだと考えた。2021 年度、A 大学では実技の授業は全 15 回の半分まで対面型で行うことが許された。本研究では、コロナ禍に対面型およびオンデマンド型のハイブリッド方式で行うこととなった保健体育科教職課程を有する A 大学の「体づくり運動」の授業を考察し、大学での実技の授業づくり、そして体づくり運動の発展の一助にすることを目指した。

II. 目的

本研究は、コロナ禍における保健体育科教職課程を有する大学の「体づくり運動」の授業を対面型およびオンデマンド型を併用するハイブリッド型で試み、自由記述の計量テキスト分析と形成的授業評価の考察から受講学生が授業において何を学んだか明らかにすることを目的とする。

III. 研究方法

1. 対象について

本研究者が A 大学で担当している「専門実技(体づくり運動) / スポーツ実技 I (体づくり運動)」の授業を対象とした。本授業は 2021 年 4 月 13 日から 15 回実施した。クラスは 3 クラス、受講者数は 66 名、81 名、67 名の合計 214 名だった。214 名のうち、185 名が 1 年次生で、それ以外は 2 年次以上の学生であった。図 1 の通り、初回の授業に出席した 202 名の学生のうち、保健体育の教職課程を履修しているのは 157 名、履修していない学生は 43 名、迷っていると回答した学生は 2 名だった。受講学生に体づくり運動の経験を問うと、「全くやったことがない」が 68%、「中学校で『体づくり運動』を行った」が 11%、「高等学校で『体づくり運動』を行った」が 5%、「中学校・高等学校の

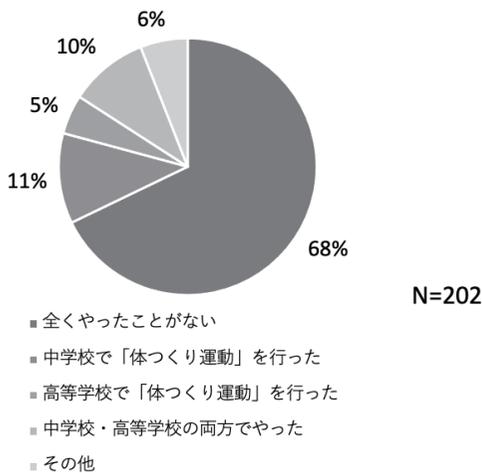


図1 受講学生の体づくり運動の経験に関する回答

両方でやった」が10%、「その他」が6%だった。「その他」の内訳としては、「記憶がない」「覚えていない」などがあった。体づくり運動の経験がある学生に経験した体づくり運動の授業内容を問うと、7名が「ラ

ジオ体操」、3名が「集団行動」と答えた。その一方で「マット運動」「器械運動」と答えた学生が13名おり、器械運動領域と混同している様子が見受けられた。

2. 授業について

① 授業方法

本授業は対面で7回、オンデマンド上で8回行った。当初は14回目の授業を対面での試験としていたが、新型コロナウイルスの感染拡大によって課題提出に切り替えた。オンデマンド上の授業について、A大学ではオンライン授業プラットフォームとしてMoodleを利用している。そのため授業者はオンデマンド授業の際はMoodle上にYouTubeに限定公開した授業用動画のURLや、Googleドライブ、Google Formへのリンクを載せた。

② 授業内容

本授業は表1のように行われた。

1回目の授業ではラジオ体操第一（青山ら、

表1 「専門実技（体づくり運動）／スポーツ実技Ⅰ体づくり運動」の授業内容

授業回	授業方式	授業内容
1	対面	ラジオ体操・風船リフティング（体ほぐしの運動）
2	対面	様々な体の動きを高める運動・運動遊び
3	対面	組立体操・ボールを使った運動
4	対面	縄を使った運動
5	対面	力強さを高める運動・Gボールを使った運動
6	オンデマンド	集団行動について
7	オンデマンド	体づくり運動の概要について
8	オンデマンド	体操について
9	オンデマンド	実生活に生かす運動の計画づくり
10	オンデマンド	組立体操・子どもたちがよい授業として評価する授業の条件
11	オンデマンド	体操の指導法について
12	対面	ペアでの体操の指導の練習
13	対面	グループでの体操の指導の練習
14	オンデマンド	ラヴェンダー体操指導動画提出・体づくり運動まとめテスト提出
15	オンデマンド	振り返りレポート提出

2020)と風船リフティング^(注1)を行った。ラジオ体操第一は授業者が示範をし、解説とともに指導した。毎年A大学の「専門実技(体づくり運動)／スポーツ実技I体づくり運動」では、初回の授業でラジオ体操を取り扱っている。授業の後半はグループに分かれた図2のような風船リフティングを行った。



図2 風船リフティングの活動の様子

2回目の授業は「様々な体の動きを高める運動・運動遊び」をテーマに授業を行った。導入としてラジオ体操第一の復習を行った後に、2人1組のペアストレッチなどの体の柔らかさを高める運動、2人1組で力強い動きを高める運動の地球一周^(注2)、巧みな動きを高める運動のねことねずみ^(注3)、子とろ子とろ^(注4)、宝運びゲーム^(注5)といった様々な体の動きを高める運動や運動遊びを取り扱った。授業のまとめでは、中学校および高等学校の体づくり運動の評価について、授業者が解説した。

3回目の授業では「ボールを使った運動」をテーマにして授業を展開した。ボールを使った運動を行う前に導入として組立体操を取り上げ、2人組の運動の四つん這いの塔^(注6)のみ実施した。組立体操を行った後は、荒木ら(2013)の「ボール体操^(注7)」を行い、その後ボールを使った様々な運動を行った。ボールを使った運動は1人で行うもの、2人組のペアで行うものを主に取り扱った。授業の最後に学生は図3のような2人1組で行うボール縄跳びの課題に取り組んだ。



図3 ボール縄跳び

4回目の授業は、「縄を使った運動」をテーマに実施した。縄を使った運動に取り組む前にボール体操の試験を行った。縄を使った運動は1人で跳んだり回したりする運動から始め、その後2人縄跳び、最後に長縄で8の字跳び、ダブルダッチ、人数を変化させる0の字跳びに取り組んだ。人数を変化させる0の字跳びは、1人ずつ跳んで1周したのち2周目は2人ずつ、3周目は4人ずつ跳び、全員が絶え間なく3周跳べたら達成という課題に設定した。

5回目の授業では、「Gボールを使った運動」をメインに授業を行った。はじめに力強さを高める運動として音楽にのせた腹筋の筋力トレーニングを行った。Lady Gagaの「Judas」という曲に合わせて、仰向けになった状態で行った。その後、Gボールを使った運動を行った。Gボールを用いた運動では、ボールに座ってバランスをとる運動や弾む運動、また、ペアやグループで複数のボールの上を転がる「スーパーマン(池田ら、2010)」などの運動を行った。最後に山寺宏一の「フレンド・ライク・ミー」という音楽に合わせて、本授業で行ったGボールの運動を復習した。

6回目の授業からはオンデマンドで展開した。6回目の授業では集団行動について取り扱い、学生は2014年1月12日に放送された「集団行動スペシャル」というテレビ番組を視聴した。

7回目の授業では体づくり運動の概要に関する授業を動画にまとめYouTubeに限定公開をし、オンデマンドで行った。体づくり運動の誕生から現在までの変遷、体づくり運動のねらいや目的を中学校の学習指導要領（文部科学省、2018）や高等学校の学習指導要領（文部科学省、2018）を参照しながら授業を行った。

8回目の授業は、体操について取り上げた。体操領域から体づくり運動に至った変遷を解説した後、一般体操について説明し、学生は「徒手体操」「手具体操」「器具体操」「組体操・組立体操」について学んだ。授業の後半で、学生は2019年にオーストラリアで行われた世界体操祭で体操の演技の映像を視聴した。それらの映像には子どもからお年寄りまで体操に親しむ様子が記録されており、学生は海外における生涯にわたってスポーツに親しむ人々の様子を学んだ。

9回目の授業では、「実生活に生かす運動の計画づくり」について取り扱った。YouTube上の動画において運動の計画づくりに関する概要と課題について説明し、まずは授業者が例を示した。その後学生は、授業レポートとともに運動の計画づくりに取り組み、その運動の計画をWordファイルで授業者へ提出した。実生活に活かす運動の計画づくりに関する課題として、近藤（2014）が指摘している「計画づくりばかりが強調されると、実際の運動時間が極端に減り、床に座ってじっとしている時間がほとんどを占める」という文献を紹介した。図4は学生が運動の計画を作成する際に使用したテンプレートである。

10回目の授業では、「組立体操」と「子どもたちがよい授業として評価する授業の条件」について取り扱った。学生は、大阪府内で起こった体育祭中の巨大ピラミッドの事故の映像（松谷、2015）について学んだ後、授業者が作成した組立体操の方法に関する動画を視聴した。授業者が作成した組立体操の方法に関する動画で取り扱った組立体操の技は、「飛行機」「四つん這いの塔」「サボテン」の3種類である。それから学生は、体操の指導法の導入として、高橋ら（2010）らのよい体育授業を実現する

学籍番号
名前

	①	②	③
運動計画の テーマ候補	ここに書く 考えたテーマ①	ここに書く 考えたテーマ②	ここに書く 考えたテーマ③

運動の候補	①	②
体の柔らかさを 高める運動 	ここに書く (運動のタイトルとその方法)	ここに書く (運動のタイトルとその方法)
巧みな動き を高める運動 	ここに書く (運動のタイトルとその方法)	ここに書く (運動のタイトルとその方法)
力強い動き を高める運動 	ここに書く (運動のタイトルとその方法)	ここに書く (運動のタイトルとその方法)
動きを持続させる 能力を高める運動 	ここに書く (運動のタイトルとその方法)	ここに書く (運動のタイトルとその方法)

図4 運動の計画を作成する際に使用したテンプレート

ための「基礎的条件」と「内容的条件」について学んだ。

11回目の授業では体操の指導法について取り扱った。体操を指導する際の予令、動令、終令について説明し、試験課題を提示した。体操指導の試験課題はラヴェンダー体操^(注8)とした。その際、学生には「声の大きさ」「動きの大きさ」「フィードバックをすること」「予令、動令、終令を取り入れること」を意識するように指導した。

12回目の授業からは再度対面での実施となった。12回目の授業で学生は改めて体操の指導法について学んだ。はじめに学生はラヴェンダー体操の動きの習得をしたのち、2人1組になって体操の指導

の練習に取り組んだ。図5は実際にラヴェンダー体操の指導の練習をしている様子である。12回目、13回目の授業では、学生は不織布のマスクを着用した。



図5 ラヴェンダー体操の指導の練習をしている様子

13回目の授業は12回目の授業に引き続き、学生はラヴェンダー体操の指導の練習に取り組んだ。前授業では2人1組になって体操の指導の練習に取り組んだが、13回目の授業では、4～5人組のグループになって指導の練習に取り組んだ。

14回目の授業は対面で行う予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大により学内の全ての授業がオンデマンド型に移行したため、オンデマンドで行うこととした。14回目の授業時間内では、ラヴェンダー体操の指導の試験と体づくり運動の知識に関する試験を行う予定だったが、ラヴェンダー体操指導の動画と体づくり運動の知識に関するExcelファイルの課題の提出に切り替えた。

15回目の授業は前授業がオンデマンドでの課題提出に切り替わって学生への負担が大きくなったことを受け、800字以上の振り返りレポートの提出のみとした。

2. 分析方法

(1) 計量テキスト分析

受講学生が毎授業後に記述した振り返りを分析データとし、フリーソフト「KH Coder Ver.3」を用いて計量テキスト分析を行った。14回目の授業は指導法の試験の動画と筆記試験のファイル提出と

なったため、自由記述の回収は行わなかった。そのため本分析の対象授業は14回目の授業以外の全14回分とした。

① 前処理

KH Coderの分析においてエラーの原因になる文字を事前に自動的に除外した。

② 共起ネットワーク

自由記述の中に10回以上出現した頻出語を対象に、KH Coderの共起ネットワーク分析を用いて抽出語の関係性を描写した。

(2) 形成的授業評価

対面授業を行った1～5時間目、12時間目、13時間目の授業終了後に、高橋ら(1994)が開発した形成的授業評価を実施した。形成的授業評価は「成果」「関心・意欲」「学び方」「仲間」の4次元からなる授業評価で、生徒が授業を振り返って主観的に評価するものである。「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点に換算して集計し、その平均点を算出するとともに評価基準に照らして評価した。毎対面授業後に体育館内のスクリーンに形成的授業評価の入力ができるGoogle FormsにアクセスできるQRコードを写し出し、学生は自分のスマートフォンで読み取り、入力した。

3. 倫理面への配慮について

本研究は駿河台大学倫理委員会の承認を得て、実施した(承認番号03 駿研倫4-1号)。

IV. 結果と考察

1. データにおける抽出語数

各授業における学生の記述の総抽出語数と異なり語数は表2の通りである。10回目の授業の語数が多い理由としては、「組立体操について、学んだことや考えたことを書いてください」という組立体操に関する振り返りを要する質問と「楽しい体育の授業の条件について、そして『よい先生』『よい指導者』について学んだことや考えたことを書いてください」という体育の授業や指導者に関する振り返りを要する質問の2種類を設定したことが考えられる。また、15回目の授業の振り返りは文字数を800文字以上と設定したため語数が多くなった。

表2 学生の記述の総抽出語数および異なり語数

授業回	1	2	3	4	5	6	7
総抽出語数	17902	20025	20873	22243	21435	16470	12457
(使用)	7397	8085	8558	8729	8701	6277	5070
異なり語数	1248	1401	1314	1365	1396	1563	1059
(使用)	996	1136	1051	1083	1112	1263	811

授業回	8	9	10	11	12	13	15
総抽出語数	15738	14696	49010	24060	20236	20696	105575
(使用)	6266	5722	19254	9650	8117	8023	41372
異なり語数	1264	1132	2312	1248	1290	1223	3397
(使用)	981	872	1948	992	1015	962	2900

2. 授業別の特徴的な抽出語について

学生が本授業から何を学んだのかを考察するために、抽出語の共起ネットワークを図6-1から図6-14に示した。

まず図6-1の1回目の授業の共起ネットワークをみてみると、「ラジオ」「体操」「授業」「思う」「風船」「体」「運動」が大きな群を成していた。本授業を履修する学生のうち8割近い学生が教職課程を履修している。授業の最初に動くラジオ体操第一を通して、授業を受ける立場の意識から今後授業を運営する立場の意識へ転換してもらいたいと授業者は考えている。そのため授業者は「教員がだるそうにラジオ体操の見本をしていたらどう思う？」や「自分が生徒だったら正しいラジオ体操を教わりたくないね」などと発問しながら学生を2人1組のペアにさせ、進行した。図6-1では、ラジオ体操と連なるようにして「自分」「教える」「立場」があり、授業者のねらいが受講学生にも伝わっている様子がみてとれた。それらに関連する学生の記述には「人に教えるということを意識しながらラジオ体操を行ってみると意外と難しく疲れる」「これから教える立場としてみんなの前に立つことができると思うので、そのときに恥ずかしくない動きをできるようにしたいです」というものがあった。またラジオ体操

の動きに関しては、「手の形や向きまでこだわったりつま先立ちのままやったり、ちゃんとやるとけっこう疲れるということがわかった」というものがみられた。

授業後半で行った風船リフティングのねらいは体ほぐしの運動の中の交流で、大学に入って間もない1年生の友人づくりも兼ねている。学生の中には、風船リフティングを別の授業のチームビルディングで行った学生、もしくはその風船リフティングの運動がチームビルディングの授業を想起した学生もあり、「チーム」「ビルディング」が繋がって現れたと考えられる。

2回目の授業では様々な体の動きを高める運動・運動遊びを取り扱った。宝運びゲームは小学生用の教材として紹介されているが、大学生にとっても頭を使うゲームであり、盛り上がった様子を伺うことができた。2回目の授業では2人組以上で行う活動が多かったため、友人と協力して取り組む様子や運動を楽しむ様子が共起ネットワークから浮かんだ。また、この授業のまとめの場面で授業者が、「中学校および高等学校では体づくり運動の授業で技能は評価されない」との旨を説明した。その様子が共起ネットワークの左下の「技能」「評価」という繋がりからみてとることができる。実際に「体づくり運

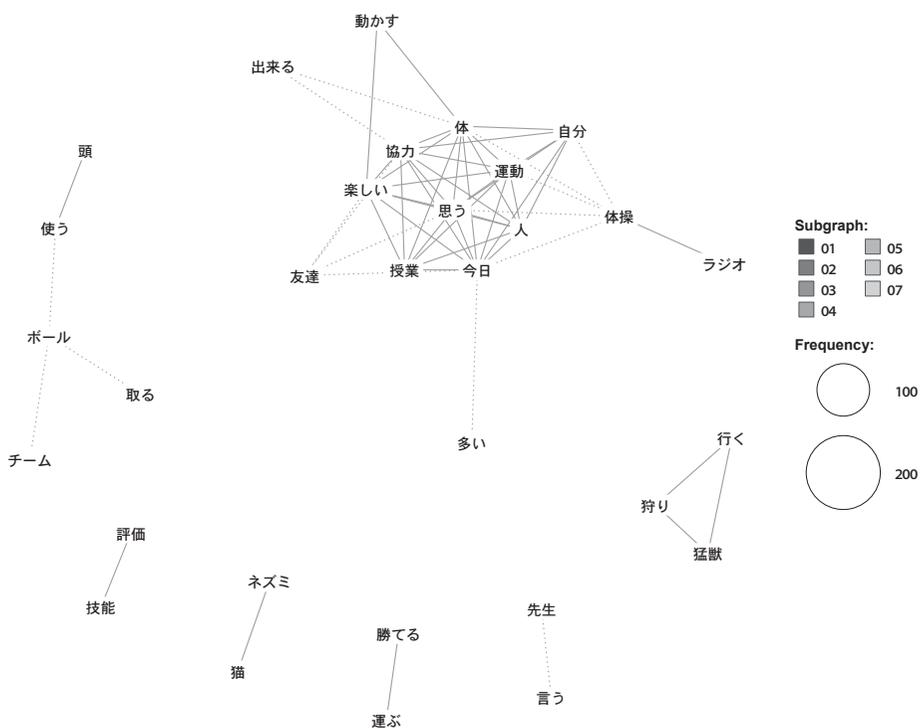


図 6-2 授業 2 回目の抽出語共起ネットワーク

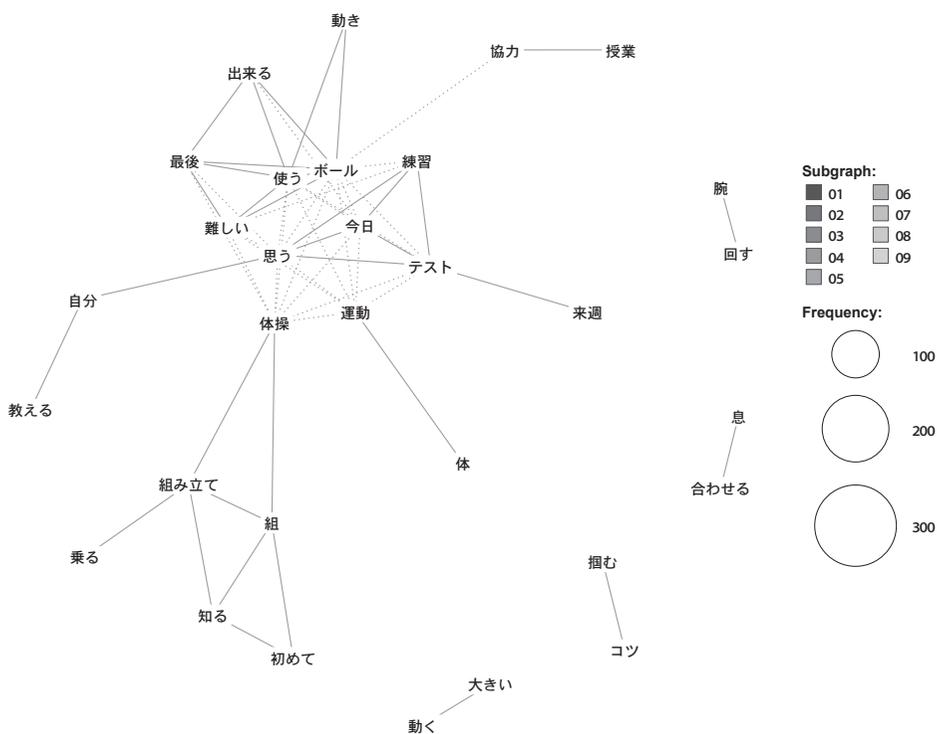


図 6-3 授業 3 回目の抽出語共起ネットワーク

後の2人組でボールをつく運動は最後の方まで残ってしまったけれど、最後まで諦めずに出来て良かった」という記述があった。授業ではボールを扱うスポーツの経験を持つ学生もそうでない学生でも、一見して技能に差がある様子はなく、今までやったことのないボールの運動を楽しんでいる様子だった。

4回目の授業では、「ボール」「テスト」「体操」「思う」を中心とした繋がりが現れた。実際にはボール体操のテストと縄跳び、縄跳びの中でも特に大縄に関しての記述が目立った。縄の運動に関しては、どのクラスにおいても大縄の課題を達成するまでに時間を要したため、「最後」「達成」「出来る」という単語が頻出したことが考えられる。ちなみに、大縄の課題に一番時間をかけたクラスは、授業時間を超えて昼休みに差し掛かっても続行したので、課題を達成するまでにおよそ1時間15分を要し、より達成感が増したと考えられる。また「意見」「出し合う」の繋がりも現れた。時間が経つにつれて話した

ことのない学生同士のペアでも、意見を出し合いながら取り組んでいた様子が見てとれた。「ロープ1本でこんなに使い方があるんだ！ということを知りました」という記述からは、縄を使った運動を通じた自分が知らなかった運動への発見がみてとれた。

5回目の授業では、「ボール」「バランス」「使う」「運動」「G」「できる」「難しい」を中心とする繋がりが現れた。実際の記述では、バランスボール(Gボール)とボール体操、腹筋の筋力トレーニングに関する記述がみられた。本授業で取り扱ったGボールの運動は学生が今まで経験してきた使い方とは違ったり、学生が想像していたよりも運動が難しかったりしたことが共起ネットワークからみてとれる。実際の学生の記述には「体の巧みな動きを必要とする運動が多く少し難しかったが、友達と教え合ってきたところがよかった」というものや「飛び跳ねたりボールの上をコロコロしたりするのは、経験がな

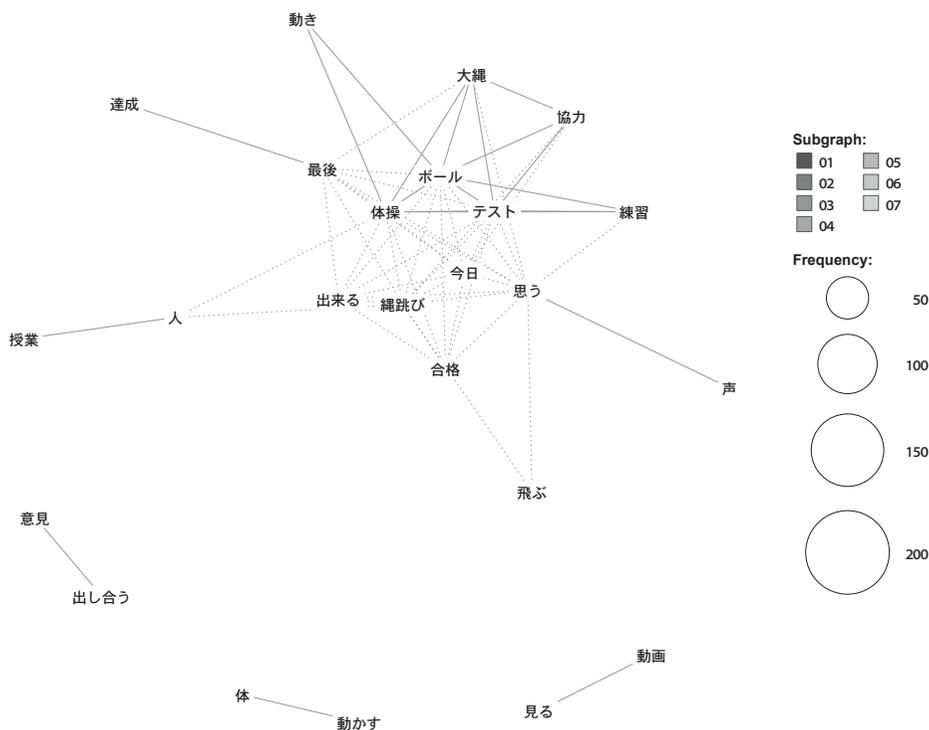


図6-4 授業4回目の抽出語共起ネットワーク

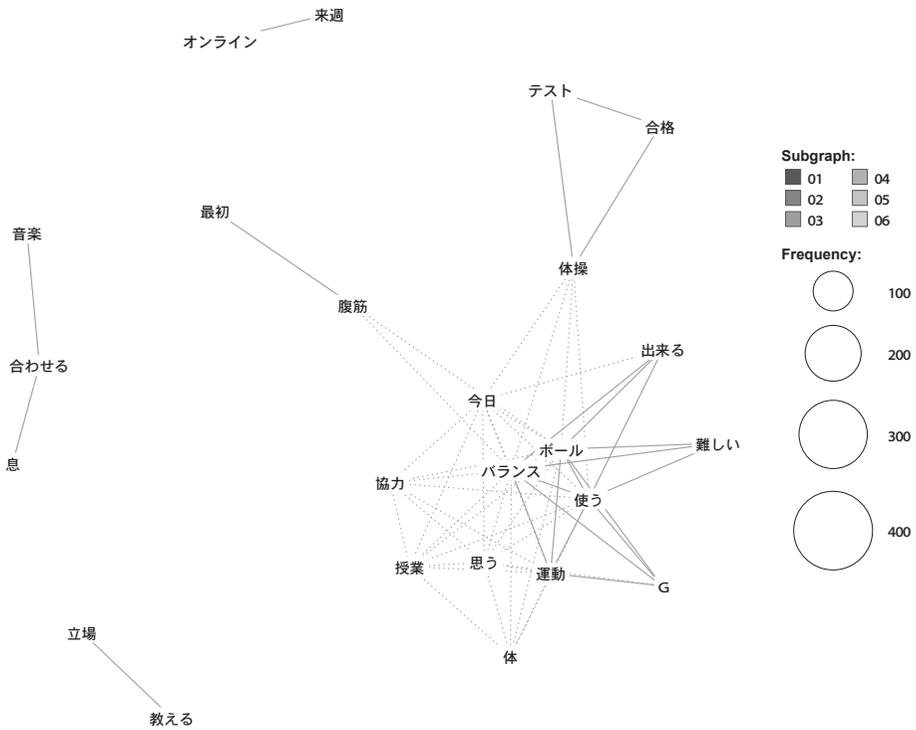


図6-5 授業5回目の抽出語共起ネットワーク

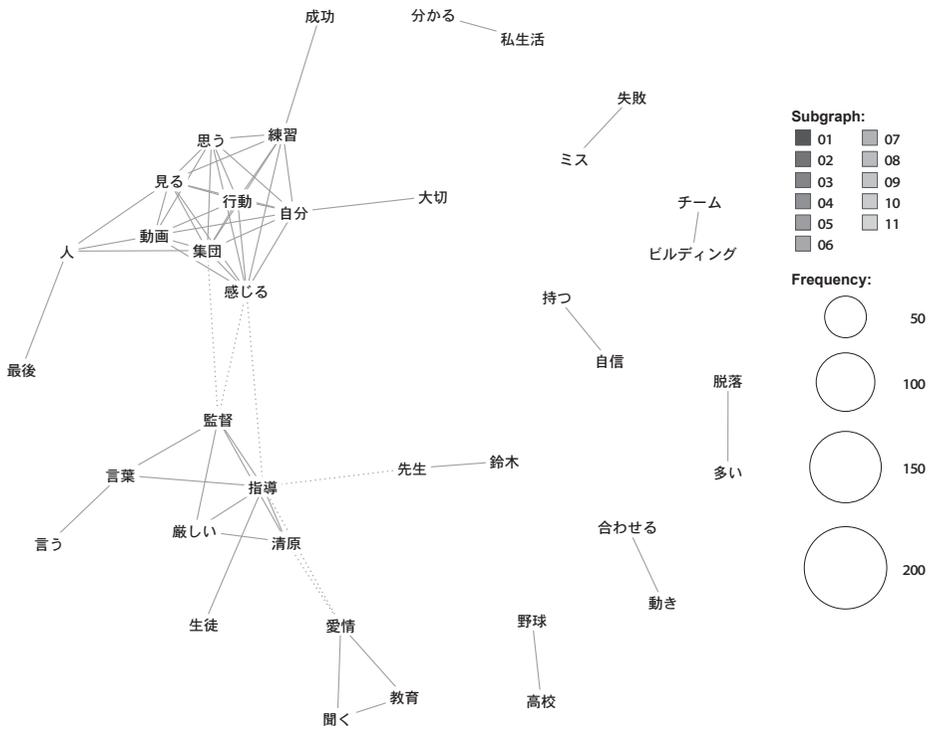


図6-6 授業6回目の抽出語共起ネットワーク

かったので、難しさもありましたがみんなと協力して出来たのでより一層の楽しさが増しました」というものがみられた。

第6回目の授業から、Moodle 上でのオンデマンド授業に切り替わった。6 回目の授業で学生は集団行動の映像を視聴し、それぞれの感想や学んだことを自由記述に書き込んだ。その結果、自由記述欄には、また学生が自身の経験した高校生活と重ね合わせ様子が浮かんだ。例えば、「高校」「野球」などといったワードが出てきた。「私は高校一年生の時に体育祭で集団行動を発表しました」といった記述や「私の高校の時の先生がとても厳しく、その先生のことを思い出しました」といった記述もみられた。しかし、集団行動と体づくり運動の関係についての記述は見当たらず、体づくり運動の授業の中に集団行動が位置づけられることがある旨は伝えきれなかったと考えられる。

7 回目の授業で学生は体づくり運動の概要について学び、自由記述からは図 6-7 のような共起ネット

ワークが現れた。「運動」「授業」「体」「体育」「学ぶ」がそれぞれ繋がりをつくった。また、体づくり運動が学習指導要領に登場した背景を授業内で解説したため、「スポーツ」「能力」「豊か」「人生」「資質」等が密接に集まっている図が現れた。体づくり運動の背景に伴って運動の計画づくりが中学校3年生から高等学校にかけて設定されていることも解説したため、「計画」「生かす」「実生活」などの繋がりが現れたと考えた。さらに7回目の授業でも「自分」「教える」という繋がりが現れ、学生自身が教える立場になった際を想定した記述だと捉えた。詳しくみると、「体づくり運動は小学校から高校まで全ての学年に存在しているが、各年次で内容が異なることを学んだ。しかし、学校の体育で体づくり運動を行った記憶がなく、体育館を走るなどで済まされていたのかも、と感じた」といった記述があり、自身の体育の経験と照らし合わせている様子が見えた。

8 回目の授業の共起ネットワークは図 6-8 の

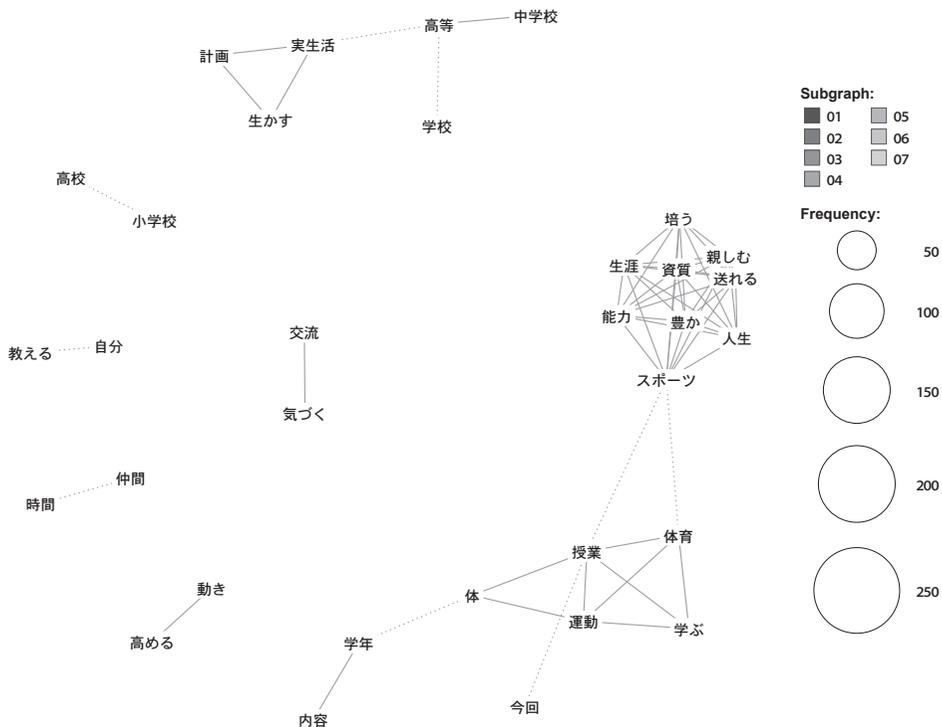


図 6-7 授業 7 回目の抽出語共起ネットワーク

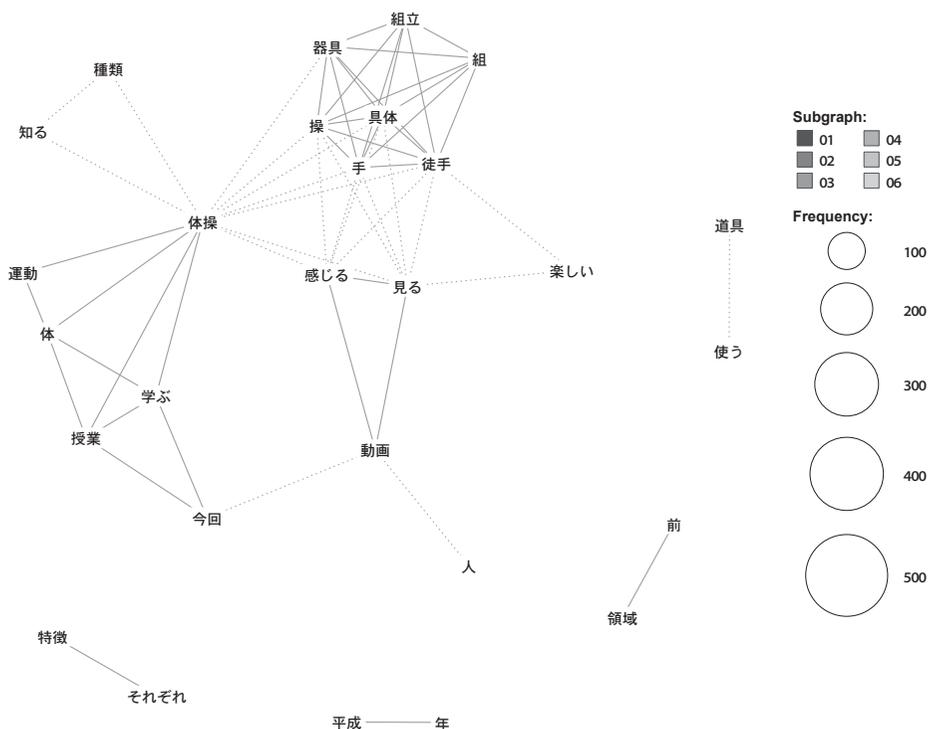


図6-8 授業8回目の抽出語共起ネットワーク

通りとなった。8回目の授業は体操について取り扱ったため「体操」が大きく現れ、「運動」「体」などの群や体操の種類に関するワードの群と繋がりを持った。世界体操祭の映像をみた学生の自由記述には「体操と聞いてイメージしていたのは、器具体操であった。しかし、体操というだけでもこれほどの種類があることに驚いた」というものや、「どの種類の体操でも行っている方々が非常に楽しんで演技していて、大人の方々も『体操』を全力でやっていて感動した」というものがみられた。

9回目の授業の振り返りの共起ネットワークは図6-9の通りである。「運動」「計画」「授業」「考える」「自分」「立てる」などが大きい群をつくった。実生活に生かす運動の計画づくりを高等学校までの授業で行ったことがある旨を記した学生は4名にとどまったため、ほとんどの学生は本授業で初めて運動の計画づくりに取り組んだとみられる。

「教師」「向上」「一方」「一時」「継続」「体力」「方

法」という群に関しては、授業内で授業者が紹介した運動の計画づくりにおける近藤(2014)の指摘に関するものであると考えられる。それに関する記述として「運動の計画を立てさせるときに、教師から複数の違った目的を提示することで、生徒に運動の計画を立てさせやすくすることができると思いました」といったものや「運動の計画を立てるといっても、運動の種類は様々あり、高めたい動きをどこに設定し、それに適した運動を選択するには自分では経験不足でしたが、今までに習った運動の例を参考に、形にすることができました」というものがあり、学生は実生活に生かす運動の計画に関する課題を学びつつ、運動の計画づくりに取り組んだことと推察した。

10回目の授業の振り返りの共起ネットワークは図6-10の通りである。「生徒」「先生」「指導」「考える」「思う」が大きな群を成し、それらに関連して「授業」「楽しい」「体育」「時間」「運動」の群が

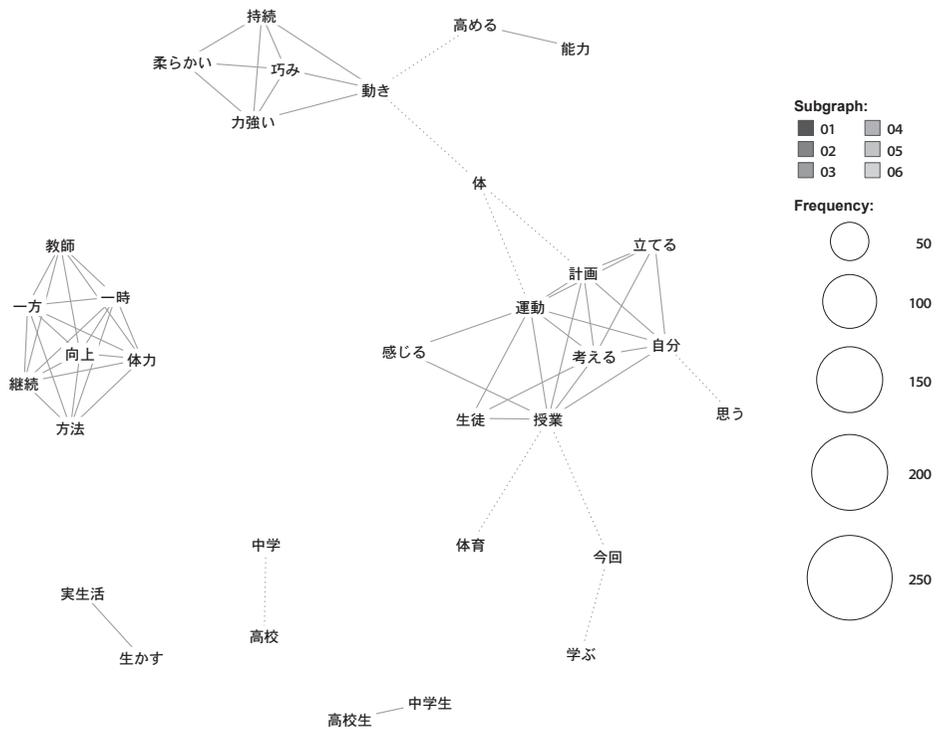


図 6-9 授業 9 回目の抽出語共起ネットワーク

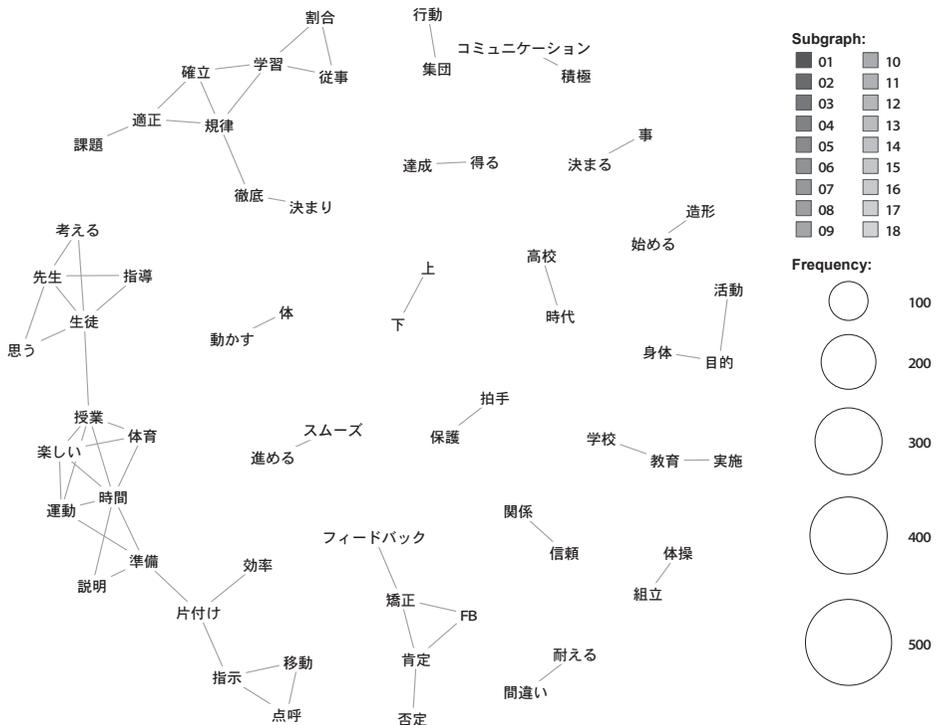


図 6-10 授業 10 回目の抽出語共起ネットワーク

現れた。これらは高橋ら(2010)のよい体育授業を実現するための条件の二重構造について学生が学んだ結果、今までの体育の授業の経験を振り返った感想として多く現れたものと考えられる。

学生は授業者が作成した「組立体操」の動画に関しては「事故が起きるのは生徒たちの能力に対して高すぎる課題だからなのかなと感じました」という記述や「組立体操は危険なので、簡単な技や造形から始めることの大切さを知った。自分が小学生の時には『耐える』という言葉が先生からよく言われたけど、積極的にコミュニケーションをとらせるほうがいいことがわかった」などという記述があった。また、子どもたちがよい授業として評価する授業の条件については、「矯正的なフィードバックができて、尚且つ肯定的なフィードバックもできる先生はしっかり生徒を見ている証拠だし、知識もあるということがわかるので、いい指導者なのではないかなと思います」という記述があった。

11回目の授業の振り返りの共起ネットワークは

図6-11の通りである。特に「号令」「指導」「見本」「動き」「説明」「考える」で大きな群がつけられた。本授業の振り返りにおいて、学生らは実際の体操指導において気をつけるべきポイントについて、自身整理したことが考えられる。学生の記述では、「指導者として意識しなければいけないポイントは本当に沢山あって、誰かに指導する立場に立っているからには自己満足ではなく、その人に伝わりやすいように自分自身が工夫して伝えていかなければいけない」といった指導方法に関するものがあった。「逆」「左右」「向かい合う」「鏡」などの繋がりについては体操指導の際の示範について書いているものと考えられる。実際には「生徒にわかりやすいように背中側からお手本を見せたり、鏡のように左右逆にして動いたりするとわかりやすいことを学びました」という記述があったことから、指導する際に受講者と反対の動きをすることに関して書かれていたと推察する。

12回目の授業の振り返りの共起ネットワークは

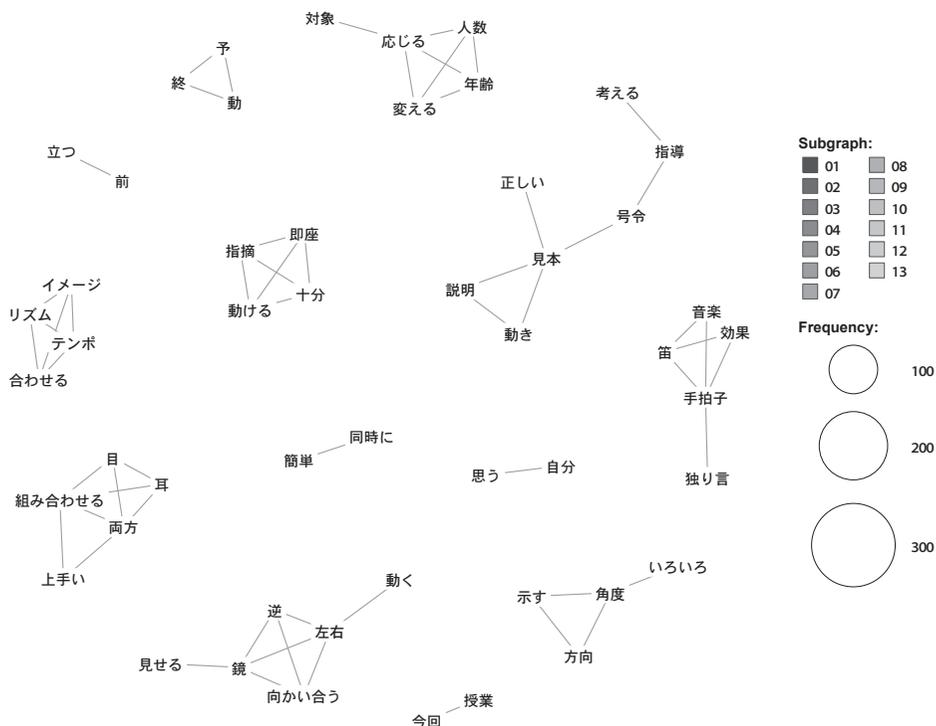


図6-11 授業11回目の抽出語共起ネットワーク

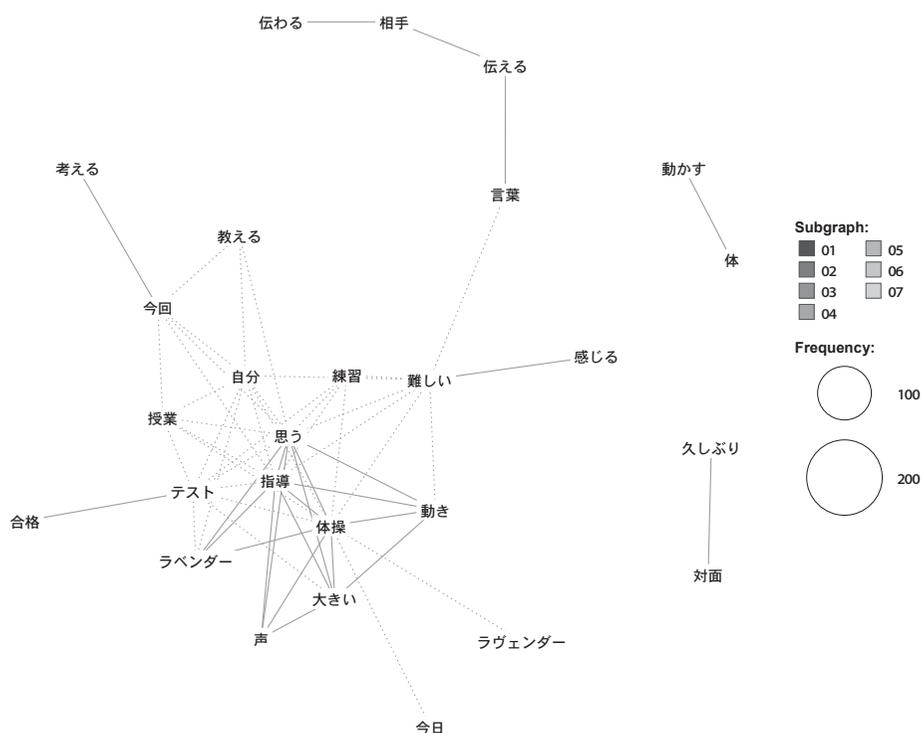


図6-12 授業12回目の抽出語共起ネットワーク

図6-12の通りである。「指導」「体操」「声」「動き」「大きい」が大きな群を形成した。それに関する学生の記述には、「いざ教える側になってみると、声が小さくなってしまったり、わかりやすく説明できなかったりして難しかった。声を大きくする、数を数え動きながら教えるというものが想像以上に難しかった」といったものや「試験だけでなく将来的にも、声と動きを大きくして、上手にカウントをとったりフィードバックをかけたりを出来るようにしたいです」といったものがあった。

また、「久しぶり」「対面」の繋がりに関して、「久しぶりの対面授業だったのでとても新鮮で時間が経つのが早かったです。オンラインの授業よりも対面授業の方がいいなと思いました」というオンデマンド授業から対面授業に切り替わったことに関する記述がみられた。

13回目の授業の振り返りの共起ネットワークは図6-13の通りである。「指導」「声」「動き」「大

きい」などが大きな群を形成していた。体操指導の練習に関する記述として「教える人が増えると地味に緊張してしまい、声も小さくなってしまった。カウントと言葉は定まってきたが、声の大きさや相手に動きを合わせていくことや、フィードバックなど細かい部分をもう少し考えていく必要があったと考えた」といった具体的な振り返りや、「いざ自分が指導するとなると、動きを言葉で伝えることはとても難しいことだった。周りはこの体操を知っているので今回の指導は成立したけど、知らない子に教えるとなると今のままでは絶対に伝わらないし、もっと考えていい方法を見つけたいと思った」といった記述があった。

「マスク」「通る」の繋がりには、学生はコロナ禍においてマスクをつけながら指導法の練習をしていたため出現したと考えられる。例えば、「マスクをつけている中でももっとみんなに聞こえる声で指導できたらいいなと思っています」とか、「今はマスク

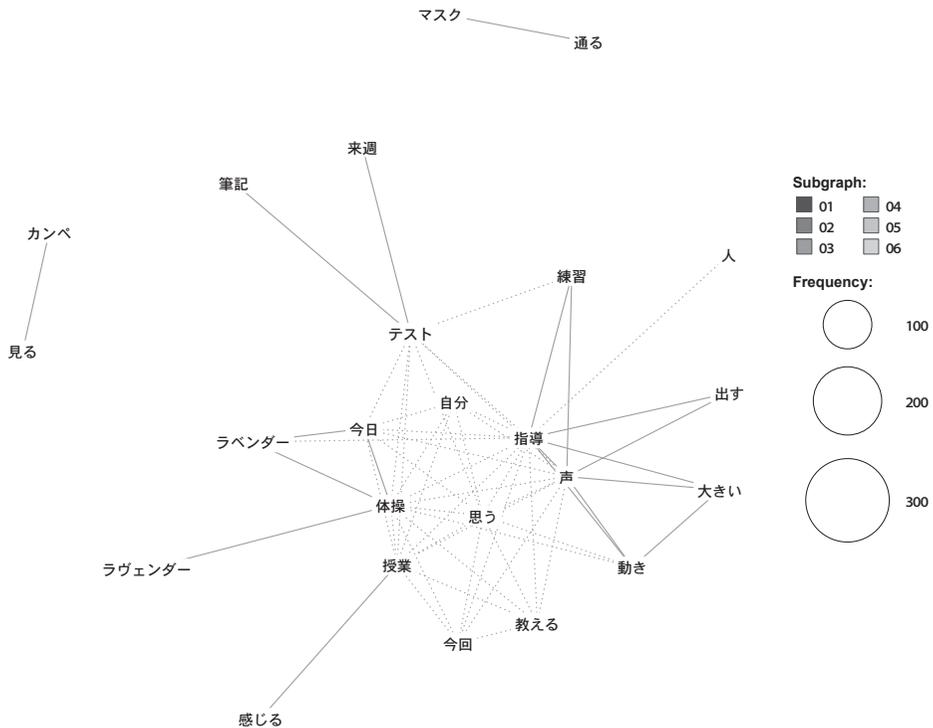


図6-13 授業13回目の抽出語共起ネットワーク

もつけて大きい声を出さないといけないのでなかなか声が通らないし、疲れます」といった記述があった。体操の指導を取り扱うようになり、学生は不織布のマスクを着用したため、苦しく感じたり、声を出しづらいと感じたりした学生が多く見受けられた。

また、12回目の授業においては、指導の練習の際にカンニングペーパーのように指導のメモを見ながら指導してもよいこととして授業を進めていた。そのため、13回目の授業では「カンペ」「見る」の繋がりは、カンニングペーパーのメモを見ないで指導に取り組んだ学生の感想に起因しているものと推察した。例えば、「前は、ポイントや詳しいやり方がわかり、しっかり伝えられました。今回は、カンペを見ないで大きい声で伝えないといけなかったのですが、やり方もポイントもグダグダでだんだん声も小さくなっていった気がしました」といった改善点がみられる記述や、反対に「なるべくカンペを

見ずに自力で思い出しながら言葉を絞り出しながら行ったことで、自然と声も出て、また力を抜いて自然な形で教えることができた」とメモを見ないことでのびのびと指導できた学生も見受けられた。

15回目の授業で回収した体づくり運動を通した振り返りの共起ネットワークは図6-14の通りである。「運動」「授業」「体」「体操」「指導」「思う」などで大きな群を作った。体づくり運動に関しては、「体づくり運動が自分が思っているよりも最近になって始まったのだと知りびっくりしました」という記述や、「体づくり運動は今までやったことがないと思っていましたが、小中学校や高校の体育の授業でやっていたことだと分かりました。今までの体育の授業では、運動のねらいを知らずにやっていたため、目的が分かりませんでした」といった気づきの記述があった。また、大きな群は「教える」「難しい」などとも繋がっていた。実際に指導をする経験を通して、教員になりたい気持ちが大きくなった

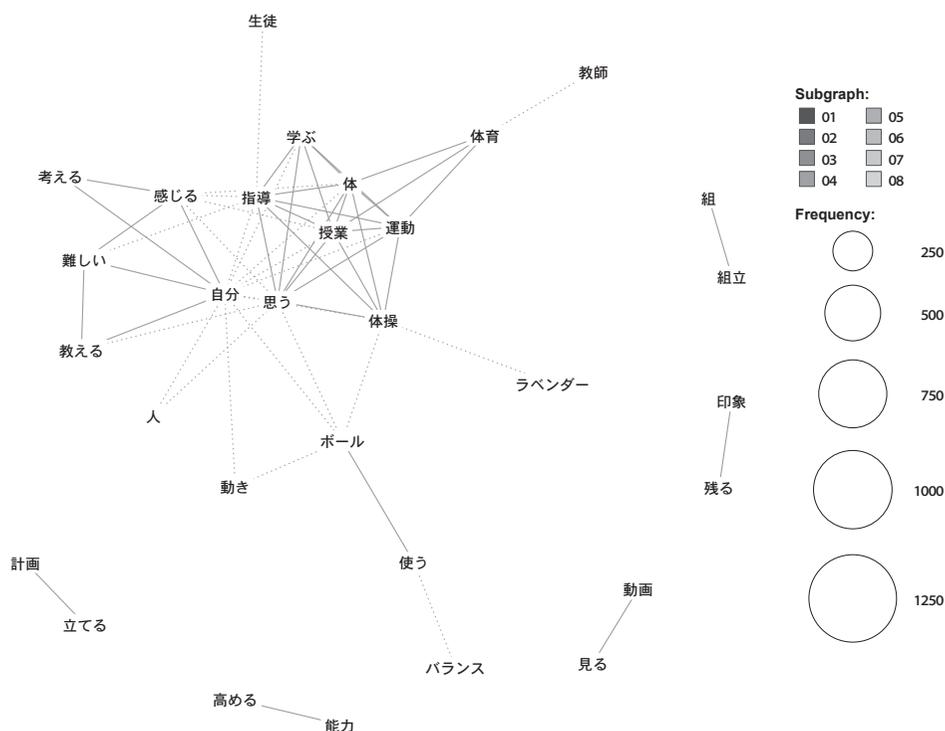


図 6 - 14 授業 15 回目の抽出語共起ネットワーク

と記す学生と、反対に進路を考え直したい旨を記す学生が現れた。対面授業の内容としては「ボール」「使う」「バランス」という繋がりが現れた。最初の 5 回の対面授業では様々な運動を詰め込んだが、ボールを使った体操や G ボールの授業が学生の印象に残ったようだ。

2. 形成的授業評価について

図 7 は毎対面授業後に実施した形成的授業評価の結果である。各項目、各次元の平均点を算出し、形成的授業評価の評価基準に照らし合わせて 5 段階で評価した。その結果、対面授業を通して高い水準を保つことができた。

詳しくみると、協力の次元が最低でも 2.97 と全 7 回の対面授業を通して高い数値が出た。高橋ら (2003) の評価基準で協力の次元は 2.85 以上が 5 の評価となるため、非常に高い数値といえる。本授業は実技を要する科目であるためハイブリッド型で授業を進行することができたが、A 大学におい

て 2021 年度春学期のほとんど授業はオンデマンド上、もしくはオンライン上で行われた。そのため、本授業のように実際に友人と顔を合わせて行う対面授業という機会が協力の次元を引き上げたことが考えられる。

また、意欲・関心の次元も最低で 2.96 と全授業を通して高い水準を保つことができた。評価基準では 3.00 のみが 5 段階評価の 5 となり、2.96 ~ 2.98 という数値は 5 段階評価の 4 となった。A 大学のスポーツ科学部の 1 年次のカリキュラムは一般教養科目が多く、実技科目が少ない。コロナ禍でなくても「もっと動いて学びたい」と感じている学生が多いとみられ、この意欲・関心の次元については、それらの運動欲求への充足度が高くなったためと考えられる。

学び方の次元は、初回の授業では 2.83 だったがその後数値は上昇した。高橋ら (2003) によると、学び方の次元は学習の自発性や学習の合理性を問う

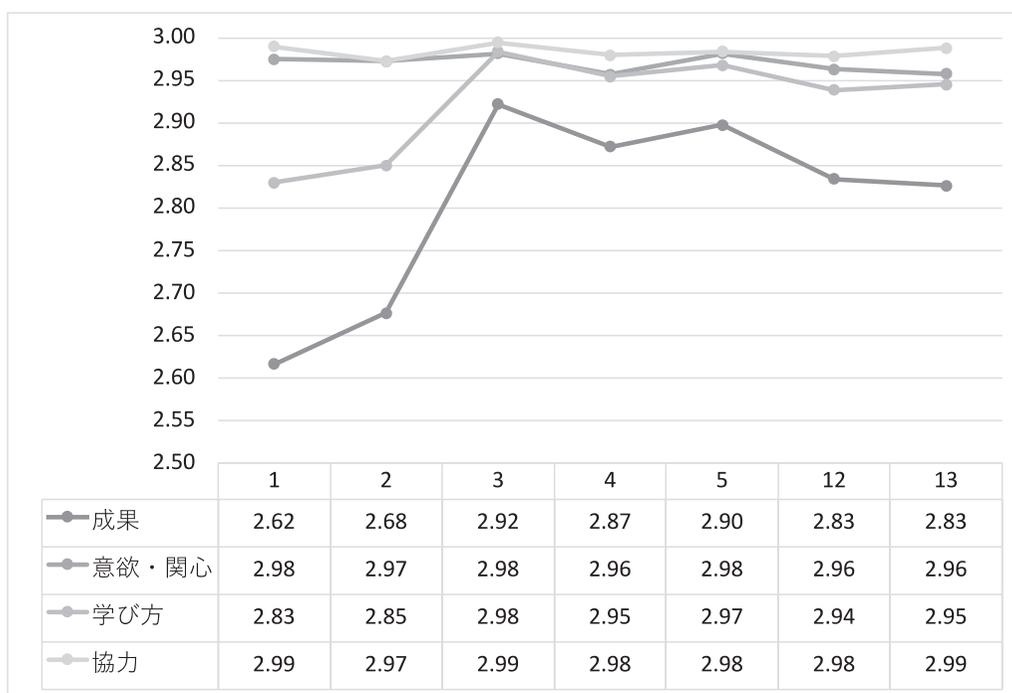


図7 形成的授業評価の結果

ものとされている。最終回のレポートには「ボールを使って動いたり、縄跳びをしたりなど最初はただ体を動かしているだけだと思っていたが、それぞれに『巧みな動き』や『動きを持續させる能力』など、学校教育で育む力の授業例を実際に行っていたことなど、後に気づくことが多かった」という学び方に対する気づきの記述や、「最初は不安があったが、今回の指導の練習や運動の計画づくりを通して、指導することに対してのイメージを膨らますことができた」という自発的な記述があった。

成果の次元は、最初の2回の授業では他の授業に比べると低い数値だったが、3回目の授業からは高く止まることができた。3回目、4回目、5日目の授業の数値から高くなった理由は様々な運動を「達成しないと授業を終われない」という課題が課されたためだと考えられる。3回目の授業の課題は「ボール縄跳び」、4回目の授業の課題はクラス全員での長縄跳び、5回目の授業の課題はボール体操である。外発的な動機ではあるものの、学生のやる気

を引き立て、成果につながったものと考えられる。

V. ハイブリッド型授業の成果と課題

本研究における授業は対面授業7回とオンデマンド授業8回で行われた。授業者の所感としては、対面授業では実技の授業としての一定の運動の経験を保障できた。また、15回のうちの半分の授業回を対面で行えたことによって、学生の友人づくりの一助になったことが成果として挙げられる。例えば、15回目の自由記述では「私は小さい頃から人と話すのが苦手でした。しかし、この授業はペアやグループで協力して取り組む場面が多く、そんなこと言っていられない！と思いながらやっていたら、いつの間にか会話ができていて楽しくなっていました。体ほぐしの運動には気づきと交流というねらいがあったので、いつの間にか楽しくなって会話ができていた、というのはねらい通りだと思いました」といった学生の記述があった。このことから、大学生においても体ほぐしの運動は重要で、チームビルディングを担う役割があると考えられる。

さらに、高等学校までの授業を受ける立場の考えから授業をつくる立場への考えの転換が見られる学生も多く現れた。体づくり運動は実技に重きを置いているにもかかわらず、例えば「体育の先生は、運動だけでできて成り立たないことを私はこの講義で学んだ」といった記述がみられた。また、「私は高校で陸上競技部だったが、大会を目指さないような部員の意見が理解できなかった。私はこの時、勝利至上主義だったのだと今になってわかる。この授業を受けて、陸上をやる目的が健康のためやただ好きなだけという人もいたのだと気づいた」という記述もあり、スポーツへの関わり方への気づきがあった学生も現れた。

一方で、オンデマンド授業を対面授業に組み合わせることで、知識に関する記述が対面授業のみで行っていたコロナ禍以前と比べると多くなったと考えている。実際に、オンデマンドで行った授業に関しては「実践的な授業だけでは学べない知識の面で体づくり運動の必要性や内容など、指導者にとって必要な知識をオンライン授業で知ることができました」という学生の記述があった。オンデマンド授業の振り返りレポートと対面授業の振り返りレポートでは、知識に関する記述に差があることが考えられるため、今後の課題としたい。

Ⅵ. まとめ

本研究は、コロナ禍における大学の「体づくり運動」の授業を対面型およびオンデマンド型を併用するハイブリット型で試み、その実践を考察した。本研究の授業を行う前の受講学生へのアンケートでは、体づくり運動を「全くやったことがない」が68%と7割近い学生が体づくり運動未経験者だった。15回の授業を終わった学生の振り返りをみると「体づくり運動がどういうものかということすらわからない状態から始まった。しかし、ラジオ体操、ペア運動、縄跳び、Gボールを用いた運動など自分自身で体づくり運動を体験してみると、今までの小学校から高校までの間のあの授業が体づくり運動だったのか、と少し理解することが出来ました」という記述があった。生徒が体づくり運動として認識していなくても、体づくり運動の類の運動が高等

学校までに行われていることが推測できた。

本研究の対面授業については、実技の授業としての一定の運動時間を確保することができた。実際に友人と顔を合わせて交流しながら行う対面授業という機会が、学生の学習意欲を引き上げたことも考えられる。その一方でオンデマンド型授業を通して、体づくり運動の知識も習得しやすかったことが推察される。体づくり運動の発展のためにも、引き続き大学における体づくり運動の授業の検証をしていきたい。

〈注〉

注1)「風船リフティング」は名古屋市体育研究会(2000)では「風船サッカー」「風船運び」として紹介されている。

注2)「地球一周」は2人1組のおんぶの姿勢から、乗り手が土台の胴体の周りを一周する力試し、力強い動きを高める運動である(名古屋市体育研究会、2000)。

注3)「ねことねずみ」はねこチームとねずみチームに分かれて、指導者(リーダー)に呼ばれた方が追いかける、もしくは逃げる鬼遊びである(名古屋市体育研究会、2000)。

注4)「子とろ子とろ」はグループで行う列になった状態の鬼遊びである(名古屋市体育研究会、2000)。

注5)「宝運びゲーム」は、根津(2016)が紹介しているルールにボールの数を変更させるなどのアレンジを加えて実施した。

注6)「四つん這いの塔」について荒木(2017)は「サーフィン」として紹介している。2人1組の運動で、体重差があっても比較的安全に行うことができる低い位置での組立体操の技である一方、乗り手の乗る位置や土台の構え方によってはとても辛くなるため、学生の気づきに繋がりがやすく、授業に取り入れている。

注7)「ボール体操」は音楽を使用しながらボールを操る体操である(荒木ら、2013)。

注8)「ラヴェンダー体操」は音楽に合わせて行う体操である(荒木ら、2013)。

〈引用・参考文献〉

- 青山敏彦・藤本直美(2020) NHK まる得マガジン誰にでも最大級の効果を！正しいラジオ体操. NHK 出版.
- 荒木達雄・三宅良輔・伊藤由美子・小柳将吾(2013) 体操教本. 図書出版.
- 荒木達雄・三宅良輔・伊藤由美子(2017) 安全で楽しい組立体操をつくる. 体育科教育 [別冊] 65(5). 大修館書店.
- 深谷秀次(2016) 小学校における「体づくり運動」の状況—教員の意識調査を通して—. 名古屋経営短期大学子ども学科子育て環境支援研究センター子ども学研究論集 8, pp.5-20.
- 樋口耕一(2014) 社会調査のための計量テキスト分析. ナカニシヤ出版.
- 池田延行・長谷川聖修(2010) 乗って、弾んで、転がって！ちゃれんG ボール—楽しく・なかよく・動きの基礎を身につける体育の授業—. 明治図書出版社.
- 近藤智靖(2014) 中学校での体づくり運動とは. 白旗和也編著, これだけは知っておきたい「体づくり運動」の基本. 東洋館出版社, pp.135-138.
- 松谷創一郎(2015) ハイリスクの巨大組み体操—警告のなかで起きた八尾市中学校の事故. <https://news.yahoo.co.jp/byline/soichiromatsutani/20151002-00050074>, (閲覧日: 2021年9月9日)
- 文部科学省(2018) 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房: 京都.
- 文部科学省(2018) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房: 京都.
- 名古屋市体育研究会(2000) すぐ使える体ほぐしの運動 136 選. 池田延行監修.
- 大塚隆(2017) 「第2各学年の目標及び内容」のポイントと解説 A 体づくり運動. 佐藤豊編著, 平成29年度版中学校新学習指導要領の展開保健体育編. 明治図書, pp.32-33.
- 鈴木慶子(2018) 保健体育教職課程を設置する大学における体づくり運動の授業研究: 大学生の体

つくり運動に対する意識. 駿河台大学教職論集 3号, pp.15-29.

- 高橋和子(2021) コロナ禍における遠隔ダンス授業の成果と課題—双方向のリアルタイム・対話形式の学び—. 環境と経営: 静岡産業大学論集 27巻1号, pp.13-26.
- 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎(1994) 体育授業の「形成的授業評価法」作成の試み. 体育学研究 39(1). pp.29-37.
- 高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝夫(2003) 体育授業を観察評価する. 大修館書店, pp.12-15.
- 高橋健夫・友添秀則・岩田靖・岡出美則(2010) 体育科教育学入門. 大修館書店, pp.48-53.
- 高田康史・筒井愛知(2017) 岡山県小学校における体づくり運動の実施に関する一考察. 吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系) 第27号, pp.177-188.
- 根津盛吾(2016) 1. どの子も熱中! ボール集め競争. TOSS LAND, <https://land.toss-online.com/lesson/aayy6qky7atys5c4>, (閲覧日: 2021年9月27日).